



医療法人近森会

# びろっば 11

Vol.232

発行●2005年10月25日

www.chikamori.com 高知市大川筋一丁目1-16 〒780-8522 tel.088-822-5231 fax.088-872-3059 発行者●近森正幸/事務局●川添昇

## 呼吸管理チーム (RCT) の発足

### 呼吸器のラウンド開始

呼吸器内科医師  
鈴木基



人工呼吸器は、集中治療を必要とする重症患者さんや、手術後の患者さんの全身管理に際して、欠かすことができない装置です。しかし長期間の装着は、患者さんにとって精神的、肉体的負担になるのみならず、感染症や活動能力低下などの合併症のリスクを高めることとなります。したがって、できる限り早期に人工呼吸器から離脱することが望ましいのですが、そのタイミングは慎重に判断しなくてはならず、主治医が忙しい仕事の合間に行なっているのでは、適切な時期を逸してしまうかもしれません。この問題を解決すべく、当院の呼吸管理委員会では、『呼吸管理チーム (RCT: Respiratory Care Team)』を発足させました。

RCTは、呼吸器内科医、クリニカル・エンジニア、理学療法士で構成され、これに各集中治療病棟の師長が加わり

ます。チームは、平日午前9時30分から、集中治療病棟において人工呼吸器が装着されている患者さんを対象にラウンドを行い、各専門の立場から呼吸管理の方針について意見を交換します。その結果を踏まえて、クリニカル・エンジニアが主治医あるいはRCT医師の指示のもとで、個別の呼吸器の設定を行なっていきます。

そしてガイドラインののっとしてウィーニング (抜管に向けて呼吸器の設定を調整すること) を行ない、抜管のタイミングを見極めます。こうすることで、人工呼吸管理を必要とするすべての患者さんに、効率的な呼吸管理を提供し、早期の人工呼吸器離脱を実現するのが狙いです。このようなチームは米国の呼吸療法士の仕事を念頭にお



いたもので、国内での先例は少なく、先進的な試みだといえるでしょう。

とはいえ、RCTは10月1日から正式稼働を始めたばかりで、まだまだ修行中です。人工呼吸器について一緒に勉強したい方や、こうしたほうがいいというご意見のある方は、いつでも気軽にラウンドに参加してください。いまや近森病院の顔とも言えるNSTやICTを見習って、患者さんやスタッフに信頼されるチーム作りを目指していきます。 すすき もとい

「ワインの神ノアの名において……汝をシュヴァリエ・デュ・タートヴァンに任ず」



3年程前になるが、フランス各地を訪ねる篠沢秀夫教授のツアーに二度ほど参加させていただいた。そんなご縁もあって、1年前に教授から「ブルゴーニュワイン騎士団」に推薦され、めでたくブルゴーニュワインの騎士に叙任されることになった。このワイン騎士団は世界でもっとも権威のあるワインの団体で、愛好家にとってはたいへん嬉しく名誉なことである。

ディジョン近郊に黄金の丘といわれるブルゴーニュワインの銘醸地が広がっているが、そのなかのクロ・ド・ヴァージョ畑の古い修道院が、今回の叙任

式の会場であった。

会場には世界各国から大使や企業家、芸術家や弁護士など、600人近くのおさまざまな分野で活躍されている人たちが参加していて、華やかななか

### ブルゴーニュワイン騎士団



近森 正幸

にも、厳かな雰囲気漂っていた。今回30人余りが叙任され、日本人は私を含め2人であった。

一人ずつ壇上に呼ばれ、地元でワインを作っているおじさんが、太いブドウの枝を肩に置き、「ワインの神ノアの名において、酒の神バッカ

スの名において……汝をシュヴァリエ・デュ・タートヴァンに任ず」と叙任され、タートヴァンを掛けてもらう。厳かななかの緊張の一瞬である。

そのあとで晩餐会が催されたが、地元料理に合ったブルゴーニュワインを楽しんだ。歌あり音楽あり、演説や駄洒落の掛け合いなど、5時間に亘るブルゴーニュ流の宴会が夜中の1時まで続いた。世界一のワインを作っている



人たちと世界各国から集まった人たちが、手を振ったり、拍手したり、心から晩餐会を楽しんでいた。

30年余りワインに親しみ、夫婦でそれなりに人生を頑張ってきた身とすれば、この地で叙任式や晩餐会に出

ることができたことに、感慨深いものがある。(理事長・ちかもり まさゆき)

# 市民公開講座を開催して

近森病院消化器内科部長 栄枝 弘司



日本消化器病学会四国支部では、毎年一般市民を対象に、消化器疾患の病態と最近の治療の進歩について理解してもら

うとともに、早期診断・早期治療の重要性を啓蒙することを目的に市民公開講座を開催しています。今年は私が高知県の主催責任者となり、9月24日に高知会館にて開催しました。

講演は

1. 岡田光生医師(近森病院消化器内科)  
「胆石症、胆嚢ポリープについて」
2. 田村智医師  
(高知大学医学部光学医療診療部)  
「内視鏡で治せる胃腸の“がん”」
3. 栄枝弘司

「C型慢性肝炎といわれたあなたに一発癌抑制をめざした治療の進歩」の3題です。

岡田医師は、実際の内視鏡的碎石術や腹腔鏡的胆嚢摘出術の様子を動画に



田村 Dr. 栄枝 Dr. 岡田 Dr.

て上映しながら説明し、普段見ることのない画像に、一般の方も興味津々の様子でした。田村医師からは、早期癌の内視鏡的治療の適応や切除方法について、高知大での治療成績も交えて講演され、とくに大腸癌と死亡者数は男女ともに増加が続いており、早期診断の重要性を強調されました。

私は、C型慢性肝炎の最近の治療法の進歩について、とくに

週一回投与のペグインターフェロン、あるいはリバビリンとの併用療法の登場により、半数以上の方は治癒可能となったこと、その他の治療法(瀉血療法など)の有用性などについて説明しました。

連休の中日でしたが聴講者は246名で、実際に病気をされている方やご家族が病気のために聞きにこられた方も多く、講演後も活発な質疑応答があり、関心の高さがうかがわれました。

最後に、事務局として苦勞をおかけした総務課主任の小谷さんをはじめ、連休中にもかかわらず手伝っていただいた多くの職員の方々にはこの場をお借りしましてお礼を申し上げます。

さかえだ ひろし



第10回医療安全セミナー 2005年10月14日 コンフォートホテル

## 浣腸による直腸粘膜損傷の 予防対策

医療安全委員 ICU主任 公文 薫



2004年度以降に近森病院で報告されたアクシデント事例を受けて、日常安易に行われている浣腸が、高齢化に伴い直腸粘膜損傷という医療事故を引き起こすことへの警鐘になればと開催し、158名(スタッフ含む)の参加を得ることができました。

内容としては、近森会勤務の看護師から得た浣腸に関するアンケート結果を手術部主任 看護師 津野裕紀美さんから報告後、アクシデント5事例の事例紹介を消化器内科科長 青野 礼医師より発表していただき、外科科長 井上 敦医師から直腸の解剖を説明していただきました。

その後、各事例についてワークショップを行い、最後に当院で現在使用されている業務手順の改定案を新館4階東棟看護師 佐々木 りえさんより提示して終了しました。

今回の提示案には、通常の間位による手技でまとめましたが、約3割はトイレで浣腸を実施しているという経緯があることから体位による医療事故をなくす為にも今後早い段階での追加改善が必要と言えます。このセミナーを通して、日常様々な処置を実施する看護師は一つひとつの処置についてのエビデンスを理解した上で、高齢化に対応する為には、疾患の理解だけではなく、身体が老いるということを理解する必要を痛感させられました。

多忙な業務の後、プライベートな時間を割いてセミナーの準備をしていただいた小委員会のメンバー及びセーフティナーズの皆さん、本当にお疲れ様でした。そして、セミナーで講師・コメンテーターを引き受けてくださった皆さまにも心より感謝申し上げます。

### ● 11月の歳時記 ●

#### 萩 (ハギ)

保育室保育士 横山 巳季



ずっと昔から日本の野山に咲いている「萩」。秋という字を持つハギは、人々に秋を知らせる愛らしくて内気な花です。万葉集の時代には、男の人も女の人もハギを髪に飾り、小さなチョウチョがとまっているような花の枝を贈りあいました。タヌキが美しい娘に化ける時、頭にのせたのもハギの小枝だったというお話もあります。

## 本院 口のリハビリテーション委員会 活動報告

本院口のリハビリテーション委員会代表・  
HCU 看護師長  
佐野 登代子



数年前に摂食嚥下チームが発足しましたが2004年1月から口のリハビリテーション委員会という名称に変更されました。

メンバーは本院病棟の各部署から選任された看護師、ST・PT・OT、歯科衛生士、管理栄養士から構成されています。

口のリハビリテーション委員会の活動目標は次の3点です。

- ①「口腔・咽頭ケアの徹底」
- ②「経管栄養法における太いチューブの削減」
- ③「適切な座位姿勢・時間の確保」

急性期の患者様はさまざまな障害を抱えており、生命維持のために治療が優先され看護師は診療の補助業務が多忙化しており業務に追われています。とくに口腔ケアにじっくり時間をかけてケアする余裕がない現状です。患者様によっては気管内挿管をしている場合や開口困難な場合など口腔ケアが難しい症例もあります。

しかし急性期治療において口腔・咽頭ケアの充実というのは欠かせないもので、口腔ケアをすることにより口腔内の細菌除去、誤嚥性肺炎予防や口の廃用予防を行い、食事の準備期として

また口から食べる楽しみや喜びを実感していただくためにも口腔・咽頭ケアの徹底が重要になります。

週1回看護師2名と歯科衛生士1名でラウンドを実施しています。ラウンドすることでスタッフの口腔ケアへの意識も変わり、患者様の口腔内が以前と比べきれいになっていることを実感しています。

ラウンド時は七つ道具をもって柿色のエプロンを着けていますので、ひときわ目だっています。気楽に声をかけてください。

今後口腔ケアによって呼吸器合併症が減少し在院日数が短縮され治療経過につながればと思っています。

さの とよこ

### ドクター・アイ

内科 要 致嘉



「要、吞んでいるか」  
「ハイ、頂いています。」  
お酒が入ると、豪快な川井先生がさらにパワーアップする。  
「要先生、研修医の三木です。」  
「内科研修でお世話になります。よろしくお願いたします。」  
「ああ、がんばろう」  
今年の春、大学を卒業したばかりの三木先生は、大きな希望と夢を抱いて、ここ近森病院で、医師としての第一歩を踏み出そうとしている。

あれから10年、そして、これから10年、少しずつ変わりゆく景色を楽しみながら、ゆっくりと歩いていこう。寄り道しながら、道なりに。  
「ノリちゃん、ノリちゃん、変なことばかり言って、飲み過ぎ！遅刻するよ！」  
かなめ のりよし

照れた笑顔はちつとも変わっていない。  
あれから10年、10年前の僕もここにいた。二次会はいつもの『ダウン』変わってない。タイムスリップしたようだ。この10年、いろんな出会いがあった。別れがあった。家族を得た喜びも、大切な人を失った悲しみも知った。義父を亡くしたとき、妻が「お父さんに逢いたい」と言った。あの言葉が忘れられない。「ひと様のお世話が出来るうちは、がんばりなさい。そして、みなさんに大事にしてもらいなさい」と医師としての第一歩を何よりも喜んでくれた祖母の言葉が忘れられない。彼らに逢いたい。

### 聴診器

#### 診療の合間に思うこと

整形外科科長

西井 幸信



養で、彼は4カ国語を使えるといっていました。確かに日本は島国で日本語しか離せなくても識字率は高く、生活や仕事で困ることはほとんどないかもしれません。環境の違いは大きいと感じましたが、英語が必要になる場面は今後さらに増えると思います。

当科では部長の衣笠先生がやはり英語の重要性を感じておられ、院内の会話スクールに通っておられます。これまでは時間がないと言い訳して積極的なことは何一つしていませんでしたが、まずは英会話スクールに参加して英語に親しむようにしようと思っています。

1週間の業務内容は木曜日の午前中の外来を除いて、病棟回診はあるもののその大半は手術です。非常に充実していますが、年に数回は学会やセミナーに参加して、演題発表や討論をしています。

近森病院では扱う症例数が多く、討論の場でも経験を生かして積極的に発言しているつもりですが、最近感じることは、英語での講演を聴いたり、討議をするときに語学力の無さから歯がゆさを覚えることです。同時通訳に頼ることがほとんどで、質問も拙劣な言葉で行なうため、聞きたいことが十分に伝わらず、反論することもままならない状態です。

学生の頃から英語は苦手科目でしたが、先日東京でセミナーに参加する機会があり、Receptionの時にベルギー人の講師にそのことを話すと、ベルギーでは数km行くとドイツ、フランス国境になるそうで、英語くらい話すのは医師として最低限の教

# 職員旅行第1弾ベトナム（ハノイ、ホーチミン）



ホーチミン廟前でかわいいポーズです

近森会職員旅行12コースのうち第1弾のベトナムへの4泊6日の楽しい旅でした。

第1班は10月11～16日  
第2班は10月31日～  
11月5日

ハノイ市

ベトナム

ホーチミン市



市内のバイクがすごい！



①ベンタイン市場で果物がいっぱい



コンチネンタルホテルの夕食会場で



レストラン「HAHOI」でさよなら夕食会

健康管理センター  
かわら版

## 仕事とストレス・こころの健康 1

### メンタルヘルスの四つの誤解と悪影響

中

産業保健師

野口 由美



こころの健康問題はとても身近で、どんなにすばらしい理事長でも、素敵な管理部長でも、こころの健康について書いている私でも、誰にでも起こります。また「誰が悪い」なんてありません。それは、とてもとても複雑なこの人間関係の中で、こころの健康問題が生じる要因は一つではないはずで

す。そして、治療には時間もかかります。

肉眼的に見えるといいのですが、こころはなかなか見えないですね。気をつけないと、再発することもあります。薬に頼りたくないと思いがちかもしれませんが、例えば眠れないときなどは、むしろ薬に頼ってもいいと思いま

す。眠れないというしんどさから開放されるのであれば。しかし、自分勝手に判断せずに、主治医とよく話し合っ

て助言してもらう必要はありますよ。そして、四つの悪影響。作業能力の低下に伴いミスや問題も起きやすくなりますね。もちろん、長期の休みに職員がなってしまえば、休んだスタッフの分の仕事が負担になりますが、どうしてこころの病気になってしまったのか？ 自分の接し方が悪かったのかな？ と考えてしまうこともあります。

上司ならば、なぜ早く気づいてあげられなかったのか？ と悩む人もいるかもしれません。そして長期の休みとなれば、治療費、手当ての負担、また長時間勤務で過労死が生じれば労災と認定されます。会社が責任を追及されることも。必要な対応をとらずにビジネスをすることは、高いリスクが伴うといわれています。職員が身体も心も元気に働けるようにすることは、企業にとってとてもプラスの利益をもたらすでしょう。

では次回は、前向きに明るく考えられるように“発想の転換”についてお話ししたいと思います。

のぐち ゆみ

## ハッスル研修医・第5回

### ER 奮闘記

研修医 隅田 陽子

昨年から始まった研修医制度の一環として内科・外科・麻酔科・救急部などの科を一定期間ずつ研修しています。

現在は二つ目の研修先の救急部に所属しています。救急部では主に救急車で来院される患者様を指導医と一緒に診察しています。近森病院は救急搬送の件数が多く、毎日ひっきりなしに救急車のサイレンの音が聞こえて来ます。

さらに私は病院の近くに住んでいますので、家にもサイレンの音がひっきりなしに聞こえてきます。最近ではすっかり耳が慣れたのか、かな

り遠くにいる救急車のサイレン音をもキャッチすることができるようになりました（笑）今ではすっかりサイレン恐怖症(?)の私です。

こんな私が医学生になるその前の話です。家族が自宅で具合が悪くなった時のことです。心配のあまり涙ながらに救急車に揺られ、一緒について行った事があります。

病院についた時は頼れる病院スタッフの方々の姿に安心感をもらい、ほっとしたものでした。その時の先生の姿を見て医師を志した私ですが、いつまでも初心の心を忘れずにがんばりたいと思います。

キラリと光る看護 **その22****明確な目標があると  
人は育つ**

看護部長 梶原 和歌

近森会で看護師が勤務する病棟は20部署ありますがその中で最も重症度の高い割合の患者さんが入院されるのがICU・CCUです。

身内や知人に心臓ならどこ？と問われると、私は「それは近森よ」と安心して答えています。浜重副院長率いる循環器疾患全般の治療水準が抜群なこと、冠動脈形成術の実績にみるように中堅医師軍団の熱意とチームワークが素晴らしいこと、加えて開設5年4カ月になる心臓血管外科チームが目覚ましい開心術成績の道を驀進している等などからです。

今回はそのチームメンバーとして伴走しているナースを代表して特定集中治療室CCUの看護について触れます。心臓血管外科開設当初の1～2年、CCUでは看護師の定着が困難でした。

新しいチームの人間関係、疾患の病態生理を把握して急激な変化を予測し異常に気づく能力やIABP（大動脈バルーンポンプ）やスワンガンツカテーテルの管理など緊張を要する厳しい環境にストレスを感じローテーションの



希望が出る始末で12床に31名の看護師が必要という大世帯のため欠員補充に苦労していました。

「がんばってできるようになった人をきちんと評価してあげたらどう？」という入江部長のアドバイスを契機にCCUクリニカルリーダーを取り入れました。レベル1、2、3段階の到達ゴールを作成し30項目の専門的手技のクリア（専門医の審査）や重篤な状態での安楽、安全、疼痛の緩和やADLの介助、患者さまやご家族への質問に応

え説明できる総合性で「CCUエキスパートナース」の院内認定制度をつくりました。

認定者も年々増え、CCUから産休に入ったナースもほとんどCCUへの復帰を希望してくれるようになりました。「～ですがどうしたらいいでしょうか」から「こういう理由で～したいと思いますがよろしいですか」の会話が多くなり、四つに編成したチームがチーム毎に勉強会にも取り組み、ICUとの定期的なローテーションも行なわれています。

沖看護師長がいちばんうれしいのは皆が勉強しだしたことで、主任やリーダーが成長し患者さまに喜ばれるこまやかな看護をベッドサイドで昼夜を問わず密に行えるようにチームを成長させていることだといいます。人を育てるリーダーシップはまず明確な目標を個々にもってもらい、周囲が可能なサポートを具体的にすることだと教えられました。 かじはら わか

## 院外エッセイ

## 熱中時代「いい歳して」には負けないぞ!!

信崎 由加

のぶさき ゆか 1958年3月高知市生まれ。  
1976年より高知県庁に勤務、現在は統計課



小学生ふたりの子育て真っ盛りとはいえ、そろそろ40代も半ばを過ぎたこの頃、同世代の友人から「何か楽しいことない？」とよく聞かれる。そして、「いっぱいあるよ！」と言うとうらやましがられてしまう。

仕事に加え、思うようにならない？子育て、町内の自主防災会活動など、マア平日や土日もかなり多忙ではある。だからこそ、人間関係や日々の生活で煮詰まったり、ストレスがたまって爆発しそうになった時の「特効薬」が私には必要なのだ。

さて、その特効薬はというと、現在はもっぱら仮面ライダーなどの特撮出身俳優の追っかけと、宝塚などの舞台鑑賞にハマっている。

いい歳してとか、ミーハーとか言われようと、かっこいいものはかっこいい！韓流スターには目もくれず、子どもと一緒に夢中で観ていたテレビに、ヒーローとして出演していた彼らのトークショーや握手会、舞台に県外まで出かけて舞い上がっている。（最近まで子どもも一緒に付いてきていたが）握手の時などに「わ

ざわざ遠くからきてくれてありがとう！」なんて言ってもらえるのも至福のひとつ。その他の宝塚やミュージカル、演劇などの舞台も、日常を忘れさせてくれる“夢の世界”……これから教育費にお金がかかるのに、貯金もないのに、家のこともほったらかして……色々聞こえてくる、くる。でも、何かをしたい、行きたいという気持ちのある今を逃すわけにはいかない。

一方、誰かの役に立つこと、これは自分の存在の意義をそこに見いだせるから止められない。今は、南海大地震に備えて、自主防災会の活動の活性化にちょっと力を入れている。アンケートや講演会を実施して、マンションの住民との接点も増え、これからも相互の交流を図りながら、防災意識を高め、いざというときに“自助共助”が出来るような地域力を培うのに少しお役に立てたらと願っている。息子たち、こんなぶつとび母ちゃんを温かく見守っていてねー。

## わたしのこの一枚

リハ4東看護師  
三木 和佳子

数年前までの看護学生だったころの写真です。国家試験を受けに高松へ向かう途中、緊張しているというものの、仲の良い友人たちと一緒にいたことも遠足気分でした。

講義や実習が厳しくても、皆がいたから乗り越えられたと思っています。今でも良い関係は続いています。ちなみに、この年は全員合格しました。

# — 食べることに向けた 各委員会の連携と尊重をめざして —



近森病院言語療法科 石井 由貴子

医療の中で、よりよく回復すること、生活に向かうことを支援する活動として、この数年、NST（栄養サポートチーム）が活発になってきたのは皆様周知のことかと思えます。食べることを支援する仕事の一部であります「摂食・嚥下リハビリテーション」に関しても、この流れを、いかに大切にしていけるかという課題が、語られるようになりました。

そこで、今回の学会のテーマは「急性期からのリハビリテーションシステムをめざして」でした。それは、簡単にはNSTと摂食・嚥下障害チーム（当院では口のリハ委員会）の連携が重要であるという話でした。NSTで著名な東口高志先生の教育講演では、とくに急性期病院はNSTを含め、多くの必要な委員会の動きを、合理的に統合していくことが大切であるということでした。

私は、栄養科の岩谷氏の協力もあり「急性期病院における経管患者の実態と摂食・嚥下リハビリテーションの課題」について報告させていただきました。

2003～04年経管栄養法利用患者の内、主病名が脳血管疾患の方32%、肺炎の方30%という、高齢化に伴う、食べるための支援を必要とする方の増加とともに、経管栄養法選択後の摂食・嚥下リハビリテーションはより課題が多くなっています。食べることを選択できず退院を余儀なくされる方が多い現状について報告しました。

課題を述べるに留まりましたが、今後は呼吸器内科の先生方も来られたりと、新たな光が射してきたため、各方面の皆様のお知恵を拝借しながら、口のリハビリテーションに取り組んでいきたいと思いました。

患者様のいちばん近くで頑張っている看護師・介護士の皆様、チームのた

めにも、現在ある委員会の光を集め、より輝きの増す活動を目指していけたら、どんなに素敵だろうか、愛・地

球博が開催されていた名古屋の空を見上げながら帰高しました。

いしい ゆきこ

## 看護管理フォーラム 2005

### 看護の専門性とキャリア・デザイン を終えて



看護部教育看護師長 松永 智香

日本看護協会常任理事廣瀬千也子氏



理フォーラム 2005 を開催しました。

まず、日本看護協会常任理事の廣瀬千也子先生より「看護職のキャリア・デザイン」と題した基調講演が行われ、認定看護師・専門看護師・認定看護管理者の制度についてわかりやすく説明していただきました。参加された方々が、真剣な表情で聞き入っていたのが非常に印象的でした。

第二部の「チーム医療の中での専門性」では、近森会とともに自らの看護の歴史を歩みながら看護に対して真摯に取り組む田元孝子看護師長、看護活動も経営も順調で元気いっぱい輝いている西岡由江看護師長、対人関係を大事にし、「周りの人に助けられながら楽しく活動している」という山下佐和看護師長、「できる看護師長の原点は漫画のような新人時代にあり、今やチャートレビュー業務をそつなくこなす」という乾静看護師長ら4名が、

10月15日（土）に院内外から107名の参加をいただき、看護管

自らのキャリアと現在の所属部署での看護の活動や専門性についての、熱い思いを語って下さいました。

今回のテーマは、それぞれの看護職者がこれまでの看護人生を振り返ったり、これからの人生を見つめなおしたり、発見したりそして新たにスタートできるそんなきっかけになって欲しいと考え、企画致しました。参加されたみなさまのキャリア・デザインや今後の看護に何らかの影響があることを期待しております。

教育委員のみなさん、お疲れさまでした。次回は、看護研究発表会（平成17年11月26日（土）9:00～12:30 管理棟5階会議室）です。がんばりましょう。

まつなが ともか

真剣な眼差しで聞き入る皆さん



(有)石原産業 代表取締役社長 / 石原 寛さん

# 近森原人という誇り

都会のサラリーマンを辞めて故郷に帰り、いつか自分で経営したいと思っていた「ジャズ喫茶」を始めたのは石原さんが31歳の時だった。場所は高知市追手筋、JBLの大口径スピーカーと管球式アンプでブルーノートJAZZを来客に聴かせた。社会はバブル期がきざし経営は順調で、夕暮れ時は狭い店内は満席、店舗2階に続くラセン階段には座席の空き待ち客が並び高知では珍しい光景だったという。

店には近森病院の医師やスタッフもよく訪れた。あまり興味のなかった医療の会話も聞くとはなしに耳に入ってきていた。そんなある日、「今でもボクには鮮明な記憶が残っている」と前置きし、日本におけるリハビリテーション医療の草分けでもある石川誠医師との出会いを話し始めた。昼下がりでお客さんはまばらな店内に、背の高い中年の男性が何やら大きなバッグを抱えて入って来た。「おじやましてよろしいですか?」。喫茶店によろしいですかと断って入ってくる人に「怪訝な応対をしてしまい、ちょっと失礼があったかも知れない出会い」から石川先生との交流が始まった。

石川先生の高知訪問は実はこの日が最初で、高知の店に入ったのもこれが最初だったのだそう。空港からバスで播磨屋橋に降りて、近森病院に向かって追手筋へ。目に映ったJAZZ喫茶の看板、訪問予定時間にはまだ充分な余裕がある。そんな偶然から職業を超えたお二人の関係が始まることになる。高知リハビリテーション学院の院生達も開店当初から店の常連客として来店し、当時はマスターとして彼らの小さな世話をしていたそう。やがて石川先生は高知へ転居、多い日

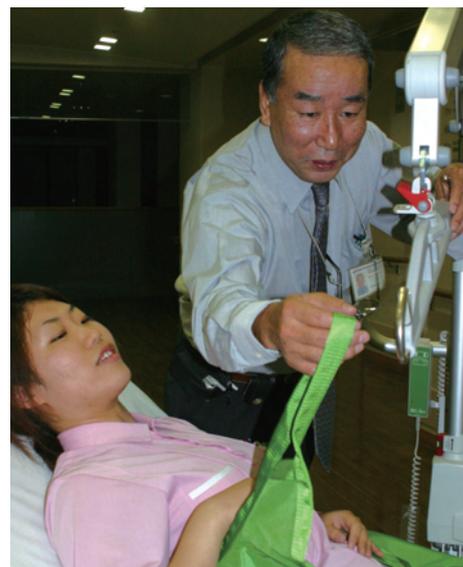
には3、4回も来店する。深夜まで営業をしていたので仕事を終え疲れた様子で来店される。いつからか石川先生の医療に対する想いの聞き役になっていたという。「店の客層も影響したかも知れない」と石原さん。ある日、「意を決して」現在のビジネスを創めることに。なじみのお客が大事な取引先のスタッフになり、昼間は職場を訪ねての、夜は夜で自分の経営するJAZZ喫茶での奇妙な勉強会が始まった。

日を置かず、今日のテクノエイドの原点となる出来事に出会う。それは、病院の幹部スタッフからの依頼で、「近々退院し自宅に帰る女性が病院に備えている歩行器と同じ物が欲しいとっているからよろしく」とのこと。うれしい依頼。JAZZ喫茶と医療機器販売業のふたつ掛け持ちの毎日、製造メーカーや問屋の取引は前金払い、しかも返品など受け付けてくれない条件であった。

歩行器が入荷し、夏の暑い西日の強い午後、一足先に退院された高知市長浜の依頼者のもとを訪問した。「おーの来たかね、待ちよった」大きな農家の庭先の居間から笑顔でおばあちゃんが迎えてくれた。あらかじめ病院スタッフから教えられていた歩行器の高さに調節して手渡した。おばあちゃんは自宅の居間からトイレに行くために購入したのだ。しかし、居間から廊下を挟んだトイレまでには畳と敷居に大きな段差があり、それをうまく歩行器で乗り越えられない。

「これは使えんぞね」。これには困った。ふと庭先に目をやると、納屋の軒先にたくさんの材木、そばには大工道具が見えた。ここでとっさに思いついた。「あの板を削って小さなスロープにすればうまく

就業後は「課外授業」を再々開き、近森会スタッフが納得して患者さんに接することができるよう、福祉機器の使い方を説明する石原社長



通れるはず」と、見よう見まねの大工仕事、子どものときから好きだった模型作りが役立ったのか、やがて少しイビツなスロープが出来上がり、敷居に添わせれば、見事におばちゃんは通過でき行ったり来たり問題なし。代金を貰い帰る頃には日はどっぷりと暮れていた。

後日おばあちゃんのトイレの手すりや他のスロープもつくったという。設備環境の整った病院と、退院して暮らさなければならぬ自宅とのギャップを埋める架け橋は、こうして最初の板が渡された。

石原社長は、「私たちはいわば忍者のようなもの。近森会の医療業務の表には出ないが、ここ一番では裏でしっかり関わっている」。これが彼の理想のテクノエイドのあり方らしい。そして、ぼそっと一言、「確実に近森会に育てられました。近森会の原人としての誇りは持っていますよ」。

子どもの頃から「いたずら好きの悪ガキ」で、思春期はリッパな不良少年として我を通し、その我を今もそのままに、あのJAZZ喫茶で語り合ったような医療の理想の姿に向かい、石原社長は信じる道をまっすぐに進まれている。



## シリーズ●わたしの趣味

新館3階西病棟看護師 森順子さん(右)の

### ケーキづくり

「一見きつそうな印象を受けるかも知れないけれど、ナースとして優しいし細やかだしきれい好きだし、そういう彼女の良さとケーキづくりの趣味がきつと結びつくはずだから!」というのが松岡看護師長(左)の当欄への「森順子パティシエ(おかし職

人)」推薦の弁。丸ごとホールのまま焼いたのを届けてもらえる病棟スタッフも幸せなら「食べてもらえるのが嬉しいですから」とニコリ微笑む森順子さんも幸せ。一見きつそうなんてトンデモない、料理が得意な母親について小さい頃から作ってきたから、小学校低学年で独りでケーキを焼いていた。「作り方は粉を溶かして膨らませるだけ」とか。工程をすっきり簡便に自分で納得しておくことがケーキ名人の第一歩。

シリーズ●クリニック探訪11

田村産婦人科

(高知市鷹匠町一丁目)天神大橋の北詰め

tel. 088-823-1110



▲院長・田村誠一郎。S 30年1月15日、東京都生まれ。趣味はフェンシング



診療科目 ● 産科、婦人科、小児科  
 診療時間 ● 9:00~12:00  
 14:30~17:20  
 (土) 17:00まで  
 休診日 ● 日曜、祝日、木曜午後

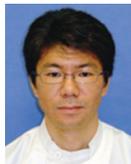


開業医であるからできる最新医療を心がけています。

- 陣痛発来からの連続モニタリング、出生直後より新生児全例にパルスオキシメーターの装着、臍動脈ガス分析、これらを実施することにより、高次元医療とのスムーズな連携が図れます。
- 独自の取り組みとしてマタニティビクス（日本マタニティビクス協会認定インストラクターの指導。また院長は日体協公認スポーツドクター）
- ソフロロジー式出産。
- 平成15年より導入したボルソン730エキスパートの4次元超音波（高知県では当院のみで、全国では一番最後に導入した県）。
- 更年期障害向けのアロマセラピー、肩こりに有効な三次元マッサージを可能にしたウォーターベッド型マッサージ器。
- 一流シェフのフランス料理、院長はスローフード高知およびインターナショナル会員。ムッシュミノルの岡林シェフの協力により、より深い食を追及。母乳育児、これから成長する子どものために食生活を吟味する。
- 緊急避妊（全国緊急避妊ネットワーク会員）などがある。

ニューフェイス ①所属 ②出身地 ③最終出身校 ④家族や趣味のこと、自己アピールなど

なかま たかひろ  
 ①呼吸器内科 ②宮崎県 ③長崎大学医学部 ④初めまして。呼吸器科の鈴木先生と石田先生の後輩です。呼吸器科医として近森病院に貢献したいとします。



中間 貴弘

プラハ「ガリアーノ・トリオ」秋のコンサート

9月28日に「いごっばち」とメンタルデイケア利用の皆さんを対象に、在宅総合ケアセンター近森の1階「喫茶「河」」で、ヴァイオリン、チェロ、ピアノによる癒しのメロディにのせて、植生の宿や見上げてごらん夜の星をなど馴染み多い曲も演奏された



編集室通信

シリーズ「わたしの趣味」では、普段仕事をしている時には知り得ないような一面が見えてくるようで、毎回興味深く楽しみになっています。皆さん、忙しい中でも長く趣味を楽しむことができているのは、時間を上手に使っているからです。これといって「趣味」といえるものがないのは損をしているようですが、まずは何かを見つけることからでしょうか。(光)

9月の診療数	近森会 外来患者数	19,320人	企画情報室
	近森会新入院患者数	801人	
	近森会 退院患者数	795人	
	地域医療支援病院紹介率	85.51%	
	近森病院平均在院日数	15.29日	
	近森会 平均在院日数	23.49日	
	近森病院救急車搬入件数	441件	
	うち入院件数	218件	
	手術件数(手術室での)	247件	
	うち全身麻酔件数	116件	

図書室便り

(9月受入分)

- ・GLENN'S UROLOGIC SURGERY SIXTH EDITION / SAM D.GRAHAM, Jr (編集)
- ・YEAR BOOK OF ANESTHESIOLOGY AND PAIN MANAGEMENT 2005 / DAVID. H.CHESTNUT (他著)
- ・ヘルスフィジカルアセスメント 上・下巻 / 花田妙子 (他監訳)
- ・実践 DVD 映像 60分「見る & 読む」で身につくコーチング(DVD付) / 酒井綱一郎(編集)

《別冊・増刊号》

- ・別冊・医学のあゆみ イオンチャネル最新線 update / 倉智嘉久 (編集)
- ・別冊・医学のあゆみ 血液疾患 - state of arts ver.3 / 坂田洋一 (他編集)
- ・臨床栄養 別冊 Dr 雨海のスーパー栄養クリニック バーチャル NST で学ぶスキルアップ 栄養ケア / 雨海照祥

《ビデオ・DVD》

- ・新しい創傷治療 / 夏井睦 (監修)